Midland Dialect 聞きある記

茂　松　文　雄

この夏一カ月という短い時間を利用して，日頃紙の上で研究していたMidland Dialectの実態に耳でふれてみたいと思い立った。その目的を果たすと共に少々慾張って，付近の湖畔地方やWalesにも足を伸ばすために地の利を得ている，Liverpool, Birminghamにも近いManchester郊外，Fallowfield, Wilbraham Roadのflatsの一室を借りうけ，ここを中心にいわゆるMercian dialectの流れをくむMidland dialectの実態を踏査してみることにした。The Midland Countiesというのは古代のMercian即ちThames河を境に以北に広がる，Anglesの割拠した地域で，今日のDerbyshire, Nottinghamshire, Leicestershire, Rutlandshire, NorthamptonshireとWarwickshireを包含するEnglandの主導的な地域で，今日のliterary English発祥の中世英語と最も関係の深いところである。尤もこの地域を一ヶ月という期間にくまなく訪ねるわけにはゆかないので，その中のWarwickshireの特にNorth Warwickshireを歩いて，みることとした。この地域はBirminghamや小邑Coventryを中心に大体Dialectが北隣のStaffordshire，東隣のLeicestershireに行われるものと酷似していて，我々外国人にとっては東西南北で多少の差違はあっても，その識別はほとんど出来ないであろうとManchester大学を訪ねた際Prof. Gauntlettから聞いた。なるほど一概にdialectといっても，これを科学的に明確に把握するには，物理的な面と歴史的な面，synchronicalな面とdiachronicalな面からの見方とがあらうし，その実態に接してみると仲々不可解な現象に逢着したのである。発音の面からも亦文法，用語，文体からみても色々問題があって記述的には近年のThe English Dialect Society刊行の英国における諸dialects研究者によったり，又十数年前から行われている英米地方語

について作製されている gramophone records によって組識的な研究を行わねばならぬと思うのでこれは充分時間をかけて他日の研究に俟つとして，今はただ，Warwickshire dialect を中心として Midland を旅して耳にしたり，録音したものを，Southern English の標準的なものと比較して観察し，将来はこれ等をもとにもっと系統だったものにしてゆきたいと思う。それについては今回なそうと志向してなし得なかったいくつかの点がある。

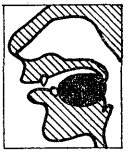
1. 手軽な Micro Cassette-Corder を用意して行ったが，先づ勝手に録音することは種々の事情で完全には行へなかった。

2. 純粋な方言は現今交通や放送，テレビ普及のために言語が標準化されて，dialectical speech の特色が識別困難になりつつあった。

3. 性別，年令層，階級層，教育程度別による録音が困難であった。

録音にはその外諸種の困難を伴うが，教育的には標準音なり標準語法なりと比較して，その差違の識別に資することが肝要であると思われる。例へば，Birmingham 郊外の農夫（50才位）が tale [tiəl]，tail [ti:l] と発し，time が〔tɔim〕と長く発せられるのを聞いた。Birmingham の Cityhall の中にある教育庁を訪ねた時に聞いたことだが，昔の Mercian dialect は今日残るものは West Saxon dialect に比すると極めて僅かで，外国人にはその研究は至難中の至難事であらうとのことであった。それ故前記の Gramophone records を聴いても，native speakers ですら識別はむっかしいとのこと。故に今日ではむつかしい歴史的な考察はさけて南方英語の標準音と対照して単に音声学的に観察するより外はないと思う。

そこで Midland を旅して，先づ気のついたことを記してみよう。この地方の人たちと話してすぐ耳にくるのは King〔kiŋ〕，sing〔siŋ〕，ring〔riŋ〕が [kiŋg]，[siŋg]，[riŋg] と [ŋ] の後に [g] の音がかすかに聞かれることである。これは Birmingham，でもそうであるが，Manchester，Sheffield でも聞かれた。D. Jones は "The principal member of the English ŋ-phoneme is formed as follows. The mouth-passage is completely blocked by raising the back of the tongue to touch the fore part of the soft palate as shown in the following figure ;



the soft palate is in its lowered position, so that when air is emitted by pressure from the lungs it issues through the nose; the vocal cords are made to vibrate; so that 'voice' is produced." といひ, *a voiced velar nasal consonant* とはっきり定義している。さらに，次のように [ŋ] について敷衍している。Varieties of [ŋ] with fronter and backer tongue-articulation occur as subsidiary members of the phoneme. Their use is determined by the nature of the adjacent vowels. Thus the principal [ŋ] is used after [ʌ], as, in *young* [jʌŋ], *trunk* [trʌŋk], and when [ɔ] precedes and [i] follows, as in *belonging* [biˈlɔŋiŋ] (first [ŋ]); a backer variety of [ŋ] is used after [ɔ] finally;as in *long* ; [lɔŋ] ; and varieties of different degrees of advancement are used after the front vowels, the frontest occurring after [i], as in *sing* [siŋ], *bringing* [ˈbriŋiŋ], (Jones; An outline of English Phonetics, p. 170 ; 650～651)

しかし *ring* も *sing* も [riŋg], [siŋg] と発せられ，さらに present participle は [ˈriŋgiŋg], [ˈriŋgin] と二様に発しているのは日本人の癖ほど強くはないが [-ŋgiŋg], [-ŋgin] 一二様に発しているのには驚いたのである。North Warwickshire dialect を用いて書いた George Eliot の Silas Marner, Chapter VI の Mr. Macey のことばの中に *meanin'* と記したり，*meaning* と記してあるのは [mi: nin] や [miniŋg] のつもりであったであろう。又 *something, nothing* も, *somethink* とあるのは [sʌmθiŋk], nothink とあるのは[nʌθ iŋk] と発したのではないかと思われる。Warwickshire の dialect speakers の発音には未だにその面影がかすかに残っているようである。Wright の Dialect Grammar に明記されていないのは，[-ŋg] と同様に微かな [-ŋk] であるためであらう。

次に [h] は本来極弱い音で，*honest* や *honour* のように歴史的には消滅しているものと，*historian* や *historical* のように時折り initial にない場合に [h] 音が消失する場合と *humour* のように現今は [ˈhju: mə] とはっきり発するが，[ˈju: mə] と却って [h] を落すのが old fashion の場合もあるが，Cockney では一般に [h] 音が脱落したり，又humble などをわざと [ˈʌmbl]

と [h] を落して発するのは教育のない発音だという。(Dickens の Oliver Twist 中に無教育な青年が *humble* を [ʌmbl] のようにむやみと [h] を落して発音する。) 筆者は Midland では北部でこの現象をしばしば経験した。国道筋や田園地帯を歩くと，路傍の民家に "Bed and Breakfast" と小さい看板を掲げた簡易宿泊所が多いが，そこで出会う人々から，*happen* (=perhaps), *horse* 等を *'appen* ; *'oss* の如く [h] を drop するのを耳にした。これは一般に weakening で *he* を [i:], *his* を [is], [s] ; *her* を [ə:] と発せられるのを随所で耳にするのと同じく，*them* の [ð] が *'em* 又は *'m* と elide されるのは英国のみでなく米国にまでも行われているで，今さら異とするには当らない現象である。(米人 Vernon Brown; Improving Your Pronunciation; Unstressed words, contractions, p. 97. 12: *them* [əm]; *Tell 'em to go.* [m]; *Keep ém warm.*) [w] という音は日本音でも「私」[watakuʃi] が [ataʃi], [atai] などと訛るに従って [w] が elide するように，英語でも一般に [w] が elide するが，Midland ではこれが盛んである。例えば，*allays; awk'-ard; back'ards; down'ard; forrard* (=forward); *forards; north'ard* と略記されるように [w] を落して発せられる。この地方ではまた *will* が多少 stress を有する時は *'ull*, stress のない時は *'ll* となり, *would* も *'ud; 'd* と発せられるのは英語一般と同様であり，*somewhat* もよく *summat* と標音的に記されるのはその分布も広いことを思わせる。その他何も Midland dialect に限ったことではないが一般に起る発音現象でこの dialect にも聞かれる子音の脱落現象を指摘すると，

1) [l] の脱落。例. *all, ball, call* が *a'; ba'; ca'* と略記されて示される北方英語の特長の一つであることは Robert Burns でも既に周知のことであるが Midland では *all* を語頭にして出来た compounds で [l] の落ちることは普通である。例. *a' mighty; a'most; a'ready* 等。

2) 子音に終る stress のない prepositions の子音語尾の脱落。例. *o'clock; jack-o'-lantern; i'stead of; ill i'bed*; *upo' my word.* 尚冠詞 *an* はこの地方では用いず，すべて *a* であることは注目すべきことである。

3) t, d の脱落。例. *keep, sleep, weep* 等の動詞は past 及び p.p. で

kep'; *slep'*; *wep'* の如く [t] を失う。[d] も *stand* が *stan'*; *ten pound note* が *ten pun' note* と発せられる。又 *castle* の如く子音が三つ並ぶと中の *t* が落ちて [ˈkɑːsl] となる如く *Lufthansa* も [lufhǽnzə] と発するのを Manchester 空港で聞いたが，これも Midland に限ったことではないようである。

4) *b.v.* の交互転換。例. pro*b*able が pro*v*able; wee*vil* が wi*bb*le 等となる。

5) 語尾 *-ce* が *-ch* に変る，*-ts* が *-ch* に，*d* が *t* (例. *chance-chanch; curtsey-curtsy-curchey; toward-tow'rt*).

6) [ð] が時に [d] に変る。 father が *fayder* の如く発せられる。

7) [g] が [y] になる。(例. gate が *yate*).

8) -dge が -g となる。(例. bridge が *brig*).

9) [n] が [m] となる。(例. evening が *evmin*).

10) [p] が [b] になったり，[r] が [l] と発せられる。(例. pilfer が belper; wrap が lap)

母音の領域で Stress のない syllable で次の如き発音変化が起ることが Midland のことばで気づかれる。

1) accent のない語頭の [ə], [in] がよく脱落する。例. acute が *'cute* [əˈkjuːt]; allowance が 'lowance [əˈlauəns]; opinion が *pinion* [əˈpinjən]; apprentice が *'prentice* [əˈprentis]; enlisting が *'nlisting* [inˈlistiŋ]; enticing が *'nticing* [inˈtaisiŋ]; inoculation が *'noculation* [inɔkjuˈleiʃən] のように発音略記される。標準音では総て [ ] 内の如く [ə-], [in-] と発する。

2) 語の mediate 又は final で，stress のない種々の母音は [i] 又は曖昧音 [ə] に近く発せらる。又語が3音節以上の polysyllable の場合 accent が first syllable にある時は second syllable の母音がこのような変化をうける傾向がある。

例. angel が *angil* [ˈeindʒəl] と略記されて，bracket の中の如く発せられる。以下同じである：carcass が *karkiss* [ˈkɑːkəs]; carrol が *carril* [ˈkærəl]; fortune が *fortin* [ˈfɔːtʃən]; orphan が *orphin* [ˈɔːfən]; innocent

が *innicent* [ˈinəsnt] である。このように stress のない intermediate vowels がしばしば elide するのは Midland に限ったことではないが，特に Midland dialect に顕著であると気づいた。G. Eliot の作品をみるとよく次のように略記して方言の特長を表わそうとつとめているのがわかる。

例. particular は *partic'lar* [pəˈtikjələ], parishioner は *parish'ner* [ˈpæriʃnə] と Midland の教会で牧師が発音したのを聞いたが，standard では [pəˈriʃənə] である。The Mill on the Floss の Chap. VII. には——there isn't many old parish'ners like her, I doubt." の文中にわざわざ *par* と斜体文字にして accent を意味して *pari*sh'ners と apostrophe をつけている。又 regular は *reg'lar* [ˈregjələ], natural は *nat'ral* [ˈnætʃərəl], favourite は *fav'rite* [ˈfeivrit] である。

以上は Midland dialect を限られた North Warwickshire で，然も短時日にその現今の発音に親しく接してみての観察であるが，一国語の真生命は dialect の中に覗ふことが出来るとは云へ，その生命の躍動を身を以て感じることの出来るのは紙上に記述された文字を通してではなく，生きている utterance でなければならぬ。この意味で筆者は録音器を携えて，Midland の地方を歩いたのであるが，事前の準備と研究の不足で所期の目的には充分到達出来なかったが，しかし，その dialect の実態の一部に触れることが出来たのは英語発音研究の上に一歩を進め将来の研究にも一つの示唆を得たと思っている。

dialect の現在の実態は今日録音機が発達しているので，生きたその姿を把握出来ようが，現実の dialect にはその由来する歴史がある。即ち五十年，百年とその経て来た dialect の過去がある。それはどうしても故人，先輩が紙の上に工夫して残して来たものを研究するより外はない。英文学上では，Charles Dickens などは作品の上に随分 dialect を頻繁に用いた作家であるが，我々外国人にとっては興味深いものではあるが，dialect の系統的な知識は得難い。Thomas Hardy は The Wessex novelist として，その作品Wessex Tales などを通して Dorsetshire の dialect にふれることも出来るが，Goerge Eliot は登場人物に適わしい方言で読者にわかり易いように

これを話し用いているので，その作品は方言を通して，鑑賞するのには我々にとっては良い資料であり，英語の言語学的な研究の上からも貴い研究資料である。次に Midland dialect として特異な意味に用いられる語句を挙げてみよう。

1. *low country*. O.E.D. には "a region or district whose level is lower than that of the surrounding country." とあるが，Warwickshire, Staffordshire では全く反対の，"*hilly part of the country*." を意味し，"They live in the *low country*." は「山手」に住んでいる意である。West Yorkshire にも "*holts and lows*." は woods and hills の意味に用いられている。(Wright, English Dialect Dict.)

2. *rights* は Warwickshire, Leicester では duty, obligation の意味に用う．(E.D.D.)

3. *while* は Manchester dialectal usage で *till* を意味し，"please wait *while* (=till) May" の如く用う。Midland ではどうであろう？

4. *simple* は London から Thames を渡って東又は南へ行くと，unintelligible の意となる。

5. *I suppose*, は Warwickshire から Yorkshire にかけては I am sure の意味となる。

6. 不定冠詞 '*a*' は此の地方では 'an' に代って用いられることは前述の通りである。

7. *a bit*=a small piece, a little; a short time or distance. 殆ど一般的に用いられるが，特に Midland で頻繁に耳にされる。a little よりも *a bit* の方は "*a bit* too much," "*a bit* too far," "*a bit* north'ard," "*a bit* of kindness" の如く，普通に用いられ，又 "not *a bit*", "*wait a bit*" の如くにも用いられる，後の方は時間に用いるのである。

8. *a bit of blood*=a horse, a thoroughbred 例. as rare *a bit of blood* as ever you threw your legs across（めったに乗れない純血稀にみる駿馬）

9. *a deal*=a large amount; much, greatly で a good (great) deal は名詞，副詞両様に用いることは周知の通りであるがこの地方では *a deal* とし

て多く用いられる。Wright の English Dialect Dictionary には "in phr. a deal of, or a deal, followed by a comparative. Also used adverb.,, とあるが, superative と共に用いられるのを耳にしたこともある，その例も Silas Marner, Chap. XVII に，"It's *a deal the best way* o' being master, to be somebody else do the ordering, and keep the blaming in your own hands." 『一家のあるじとしては「ああせい，こうせいは人にさせ小言だけは自分の手に握っているのが一番ですわ』

10. *a lot*=a number, an indefinite number or quantity. *a lot* better than .....等と用いたり，*a lot* of .....と用いる。the whole *lot*, quite a *lot* の如く用いるが，*lots* と複数の方も多く用いられる。

11. a many=many. a few, a good(great) many からその意も類推出来る。

12. *a matter of*=about, said of number or quantity

    例，*a matter of* ten pound.

13. *a sight*=a number or quantity, a good deal

    例. lay by *a fine sight of* money.「しこたま金をためこむ」; know *a fine sight* more than that.「もっとずっと沢山知っている」

14. *against*=near, next to. Midland に著しく用いられる。教育あり，言葉に気をつける人は，"He stood *against* the door. He lives *against* the church. と云う。これは Birmingham で日曜日教会で耳にした。

15. *all of a muddle*=utterly confused

    all of a tremble=trembling all over

    cf. *all of a sudden.*=suddenly; all of a heap. stupified with amazement or terror.

斯く *all of* に単数の名詞をつけるは dialect に広く行われる語法，例；

all of a hot=unexpectedly

all of a dither=trembling

all of a mess=confused

all of a piece=stiff, crippled by rheumatism

all of a puther=stupified

all of a sweat=all covered with sweat;

all of a swim=very wet;

all of a twitter=trembling

これ等はいづれもこの地方の dialect である。例. *Oi wur* struck *all of a heap, loike*, when *Oi heered yo neeam moy neeam. Oi thout for sure* as *moy* hour *wur coom*. ——Dr. Evans, Leicestershire Words. 普通の英語にすると, "I was struck all of a heap, like, when I heard you name (v.) my name. I thought for sure as my hour was come." 註 *Oi* (=I で発音は [a' i]); I *loike* (=like. Midlanders が話の中に盛んに投用する間投詞的なことばで, 前の文句を軟らげる効果がある。); I am *all of a twitter* yet. (いまだにふるいが止まぬ); She was *all of a muck of* sweat. (からだ中汗だらけ.)

16. *All one*= all the same; no difference. 例. It's *all one* to me. (どっちだって同じだ.)

17. *along of*=in consequence of; because of; through. O.E.D. には "Common in London and southern dialects generally" とあるが, Wright, E.D.D. には北は Durham, Northumberland にまで及ぶとある。例. They said it was *along of* his wife's dying. (妻君に死なれたからとのこと。)

18. *…and all…and everything*. (…も何もかも) の意に用いられる。例. It's *all gone*—Chapel *and all*.

19. *and all that; and such; and things*. 「…なんか」の意で頻用される語法で, 18. と殆ど同様である。例. managing companies and *all that*. (会社なんか経営して); speaking of money *and such*. (金なんかのことを云う); I want to give him an eddication (=education) as he'll be even wi' the lawyers *and folks*.—The Mill on the Floss, VIII. (弁護士なんかとちゃんとやってゆける位の教育をしてやりたいと思う).

20. *and welcome; and willing*,=willingly, gladly 付言的に文尾に「……よろこんでね; 進んでね」といった気持ちでつけ加へる場合によく用いる。

21. *anyways*=in any way whatever.

22. *as anything*=exceedingly. 註, as…as any. (だれ〔どれ〕にも劣らずの語法を参照)。例. I'm as glad *as anything* at your kindness. (君の親切が何より嬉しい.)

23. *as is*; *as was*. 前者は present, 後者は former を意味し, 人名の後に用い, 例えば, Mr. Jones *as now is*.(現在の Jones 氏, 即当代の Jones 氏.); And sure enough the wedding turned out all right, on'y poor Mrs Lammeter—that's Miss Osgood *as was*—died afore the lasses were growed up.—Silas Marner Ch. Vi. (して, 確に結婚はうまくいった, ただ残念なことに Lammeter の奥さん——もとの Oswood 嬢は——娘たちの成人もまたず亡くなった。(註 as was は *née*, *ne* [nei; F. ne] adj. 既婚婦人の名の後につけて, 実家を示す旧姓……例. Mrs. A, *née* Smith.(A 夫人, 旧姓 Smith).——研究社, 大英和辞典。

24. *All as is*. Midland では屢々 the sum total, the whole of the matter の意で 23. の類である。

25. *atop*=on top; *atween*,=between; *ayther*=either の意に用う。

26. *bad off*=badly off; ill off; unable to get along.

27. *belike*=probably or possibly.

28. *betimes*=early; at an early hour. 例. When one gets up *betimes* i' the morning, the clock seems to stan' still tow'rt ten, Silas M., Ch. XIV.

29. *call*=occaision; need; necessity. 例. You han't *no call* to be afeered of me. Dickens, David Copperfield. xxxii. この語は英各地に普通用ひられる語で十中八九は否定文中に, 他は疑問文中に用いられると云ってよい。*call of the wild* 等参照。(O.E.D.)

30. *can*=any vessel, especially of tin, a drinking cup.

31. *cap*=to outdo; to surpass.—— dialectal なことばで, O.E.D. には 'at first north. dial'. とあるが, E.D.D. には中部, 北部に多いとある。O.E.D. には Jane Eyre から 'Well!.....that caps the globe.' の引用があり, Wuthering Heights にも 'Mrs. Linton *caps* them all. (XII)' がある。E.D.D. には共に West Riding of Yorkshire とある。

32. *cast*=twist or turn 例. a fellow with *a cast* in his eye. (藪にらみの男)

33. *catechise.*=catechism (n) は ['kæti(ə)kizm] (v) は catechise or——ze [-kaiz] と区別。

'cause,=because. cause, cos, coss 等と綴り，英のみならず米にも普及。

34. *certain sure,*=quite sure E.D.D. では Derbys. Warwicks. Herefords. Oxfords, Surrey, Sussex 及 Wiltshire と広く用いられるとある。Lincolns では all alone by yourself, free graits for nothing も often sometimes, always sometimes の冗句も聞かれる。

35. *cheer*=entertainment 即ち「御馳走」の意味ではよく用う。例, I liked your cheer.

36. *collogue* [kə'loug],=to have a private understanding with; to intrigue, collide, conspire. Now dialect (O.E.D.) 例. And how long have you been so thick with Dunsey that you must *collogue* with him to embezzle my money?——Silas M. IX. (して，おまえはわしの金をくすねにやならん位いつから奴となれあっていたんだ？)

O.E.D. によると，この語は現在各地方に存するがその歴史についてはさだかでないとある。

37. *colly,*=to make black or dirty with coal-dust or soot; to blacken

38. *comfortable,*=agreeable, pleasant, obliging, complaisant.

註，こんな含蓄の多い語は簡単に邦訳はむづかしい。

39. *coot,*=to court.

40. *dark,*=doubtful; unknown; mysterious.

41. *dear heart,*=dear heart alive. Midland 地方に極普通な驚きの間投詞で，「おや，まあ」にあたる。

42. *ding me if*……=surely not. hang me if……damn よりは柔かな語 (O. E.D.) 例. Ding me if I remember…….

註. この構文は「私が……を記憶しているなら ding せよ」の形で「そんな記憶はない」の意に用う。ding は打撃の意を持つ名詞又は動詞とし

て一般に用う。Warwickshire や Leicestershire で学童などの間で，告げ口又は仲間間の規約を犯したもののあった場合数人がかりで，その違犯者の手足をとり，その臀部を樹の幹とか壁又は柱などに打ちつけて，これを懲罰するが，かくすることを "dinging the boy,' と云うので，E.D.D. は次の例文でこれを示している。

"They dinged him against a tree.——E. Smith, MS. Collection of Warwickshire Words.

同じことを "ding-fart" とも "boss" とも云う。

43. *do for*,=to finish; to end 即ち「やっつける」である。"I'm done for" 「やっつけられた」.

44. *doubt*.=to be afraid; to look forward to the occurrence of anything painful, with a feeling of certainty implied; to apprehend, expect; also to fear, suspect a person or thing (E.D.D.)

45. *ear-droppers*,=ear-rings

46. *easy*,=easily, 今日は "*Easy* come, *easy* go." の如き諺に用うるのみ。然し dialect では広く用いられている。"Take it *easy*" の如き慣用がある。

47. *ever so*,=very, very much. "Thanks *ever so* much," "*ever so* nice." と盛んに用いられる。又時に "He drinks *ever so*". (あの男ずいぶん飲む.) "Be it *ever so* humble." は民謡で周知の通り。Midland dialect には "I wunt ax (=ask) 'im for bread, not if it was *ever so;* I'll clem (=starve——中部以北は suffer from cold の意で，飢餓ではない) first."——Mrs. Chamberlain, West Worcestershire Words.

(私はどんなことがあっても，あの人に食はしてくれとは頼まない。むしろ餓死する。)

48. *feature*,=to resemble in face or features. 中南部に普通な語，例. I *feature* my father's family. 血族関係に類以するに用うるのが普通であるが，時にはそうでない場合もある (Wright, E.D.D.). 例. I've had my picture took; do you think it *features* me?

——Dr Evans, Leicestershire Words

49. *fend*,=to strive, to struggle; to work hard especially in gaining a livelihood. 此の語は中部以北 Scotland 地方にも用いられる。例. Simple folk *maun fecht* (=must fight) an' *fen*,' ——Burns, Gone is the Day. (平民は奪闘努力せにやならぬ)

50. *fine and*,=very; exceedingly. 例. Ah, you're *fine and* strong, aren't you? (ああ, ずいぶん強いんだね, お前は) *fine and* hungry, *fine and* tired は中部北部で耳にしたことを覚えている。湯が *nice and* hot であり, 気候が *nice and* cool は米国にまで普通の語法である。道具を beautiful and smooth と賞めたり, awful and tired といって席をはずして休むのも皆同類の語法から来る。

51. *fly out*,=to burst into violent passion.

52. *folk*, *folks*,=poeple 中部以北の人々の間では今日も普通であるが Thames 以南でも相当用いられ複数形では全般に workpeople を意味する。例. F.T. Elworthy, West, Somerset Word-Book によると, "They'd employ a sight o' women *vokes* (=folks). but there *idn* (=isn't) very much *vor* (=for) men vokes to do." とある。

註. *vokes* (=folks) [vouks] と発せられ, すべて [f] が [v], [s] が [z] と発せられるのは Somerset [zuməzid] dialect の特徴である。標準は ['sʌməsit] 又は ['——et]. folk が「家族」「一家」の意に用いられるのは, 唯米国のみでなく, 英国でも中部以北では今日尚一般的である。(Wright, E.D.D.)

53. *gentlefolk(s)*=gentry. 上流人は gentlemen とも呼ぶがこれも Midland に限ったものでなく, Tess 等にも頻出するので, Dorsetshire dialect にも用いられとみてよい。

54. *girl*,=servant girl; unmarried woman in service of whatever age. Warwickshire の田園語として今日でも次の意とみてよい。

The girl is the invariable title of the servant girl of the farm.——Mrs. Francis, South Warwickshire Provincialisms. これに対して, 一般に「若い女」は 'wench' 又は 'lass' である。

55. *going in,*=approaching (of age and time); nearly; almost 例. He is five *going in* (*on*) six. (五つだがやがて六つだ) It is *going on for* five. (もうかれこれ5時.) 註, in の代りに for, of, on, upon が用いられることもある。North Staffordshire の例で, "I shan't be home before *going for ten.* ——Adam B., ch.1.

56. *goings-on,*= conducts in general. (通例悪い意味を含めて)「所業, しわざ。」例. His strange goings-on.

57. *good,*=considerable; large; of time or distance. standard English でも 'a good many," "a good deal" などあるが, dialect では *a good few* (= a considerable number of), *a good bit* 又は *a good while* (=a long time) など用途が広い。

58. *handsome,*=honorable, noble. 今日諺として "*Handsome* is that (as) *handsome* does." (cf: Goldsmith, The Vicar of Wakefield, ch.1.) の中の意味で, Wakefield は Midland の北隣であるが Midland dialect 中の語彙である。Silas M. Chap. III に "at one time everybody was saying, what a *handsome* couple he and Miss Nancy Lammeter would make!" とある handsome は正に noble 又は honorable の意に用いているによっても分る。又同じ chapter のそこより少し先のところに, "I might tell the squire how his *handsome* son was married to that young woman Molly Farren, and…" とあるのも「男振りのよい」と云う意味ではない。

59. *happen,*=perhaps の意味で頻用される。

60. *hear tell,*=to hear by report; to be informed.

hear say (*talk*) of……とも用う。勿論いづれの場合も *hear people say* の省略であることは言うまでもない。用法の始まりは古く Beowulf に発し, 今日は方言, 口語, 時に文語にも用いられる。(O.E.D.)

61. *hearty,*=having a good appetite, eager for food. E.D.D. によると,

この意では Yorkshire, Derbyshire, Cheshire 及び Warwickshire の方言に用いられる。即ち中部以北に広く用いられる。もとは *in good health or spirits* の意から転じた. 例. "O, for shame, Aaron," said his mother, taking

him on her lap, however; "why, you don't want cake again yet awhile. He's wonderful *hearty*." she went on, with a little sigh—Silas M., Chap. X. (「おや，なんですね，エアロン」でも母はその子を膝にのせて云った。「いえ，お前お菓子なんかまだ当分はいらんわねえ——とてもこの子食いしんぼですの.」と，ちょっと，といきをついて彼女はことばを続けた。Wuthering には "And do you imagine that beautiful young lady, that healthy *hearty* girl, will tie herself to a little perishing monkey like you? とあって，「元気な」意味にも用いている。hale and hearty「老いて益ゝ盛んな」などにも用い，米国では Longfellow, Miles Standish. V. 73 に "square-built, hearty, and strong" がある。

62. *himsen*,=himself. dialect では *hissel*, *hissen* ともいひ，myself は *mysen* と訛るのは周知。

63. *hoss*,=horse これも古来からあったもので，分布域も広い。

64. *howsomever*,=however; nevertheless. Now dialect or vulgar(O.E.D.) 例. *Howsomever*, it was soon seen as we'd got a new parish'ner as how'd the rights and customs o' things, and kep a good house and was well looked on by everybody.——Silas M., Ch. vi. (だがそんなことは物の道理やしきたりをわきまえ，きちんとした暮し方をし，みなの者にあがめられた人が教区に来ればすぐにわかった。)

65. *I reckon*,=I think; I am of the opinion. この語は Midlanders のみでなく，England, Scotland でも一般に country folks の最も普通に用うるところで，parenthetically に，又は finally に多く用うるが，米国では主として南部で用い，北部諸州の *I guess* と共に I think 又は I am pretty sure の意である。

66. *I suppose*,=I understand, believe, or know. E.D.D. には Scotland, Yorkshire, Nottinghamshire. Lincolnshire, Rutlandshire, Leicestershire, Warrickshire, Shropshire, Herefordshire, 及 Sussex に用いられるとあげ，In phr. I suppose, I suppose so, used to express certainty. と説明されている。はたしてそれだけ広く一般に用いられるか否かは疑わしいが，Midlanders

の間に行われていることは筆者も認める。例. I *suppöase* he's deäd, for I was at the funeral.——Edward Peacock, Manley and Corringham Words. (North Lincolnshire)

67. *inside*, (1)=the inner parts of the body, the stomach, entrails etc. 即ち「おなか」の意で，日常最もよく用いられる。例.....if you ever feel anyways bad in your *inside*.....Silas M., chap. x.（「若し，おなかの具合でも悪いなら……」

inside, (2)=heart or mind. 例. It's your *inside* as isn't right made for music.——Ibid., VI.（「喉がまるで音楽向きにや出来ていない」）

inside, (3)=within. 前置詞として「肚の中」「胸の裡」の意に用う。例. I've often a deal *inside* me as 'll never come out.——Ibid., XVI.（「胸の中に色々思っていながら，それがどうしても云へないことが度々ある」）又 inside を名詞として「肚のなか」に当る用法もある。

例. But where's the use of talking? You can't think what goes on in a 'cute (=acute) man's *inside*.——Ibid. VI.（「なんぢゃかんぢゃ云ったって何にならう。はしこい人の肚の中にやどんなことを考えているか読めたもんぢゃない。）」

68. *kitchen*,=ordinary sitting-room in a farm-house or cottage. O.E.D. にも kitchen については満足な説明がないが，実際に Warwick の田園を歩いて kitchen をのぞくと，Thomas Wright の Dictionary of Provincial English に上記の如く定義されて，日本の台所ではなく，むしろ普通の居間に近く，農家の general living-room, without any introductory lobby or passage; with the door opening to the road. とあって，道路からぢかにのぞける至極親しみのあるものである。だから食堂で朝食なぞ馳走になっても，食後は立寄って雑談したり気楽に立ち入って世間話なども出来るのが Midlanders の kitchen である。

69. *like*,=so to speak; as it were. 既に 15. で *loike* として説明した like のことであるが，[loik] と発音するので，標音的に綴ってあるが，この語は文法的には loose な投入語で，多くは或語又は或叙述を和らげたり.

時には expletive として，又は redundantly に頻用される語であるが，この語の一番明確な説明は次の Dr. Evans の Leicestershire Words からのものであらう。

The Midlander for the most part carefully eschews any direct form of speech, and prefers intimating his meaning by a conventional circumbendibus. His anxiety to express himself clearly, and at the same time to avoid either compromising himself or in any way offending his hearer, generally induces him to throw his remarks in a quasi-hypothetical form, and the word like affords him a convenient instrument for so doing. At the end of almost every sentence, therefore, which contains a statement, the word finds a place, as if to take off any harshness or aggressive angularity which might attach to the statement in an unqualified shape. 即ち，「Midlanders は大低ぶっつけな物の云ひ方は気をつけて避け，言ひきたりの婉曲な言ひ方で我が意をそれとなく伝えるようにする。一面自分の思う所をはっきりと伝へることを期すると同時に疑惑を招くような云い方をしたり，どんな風にでも話し相手の感情を害したりする云ひ方は避け，一般に「まあ云わば」といったような仮設的な云ひ方をする。そうするにはこの like という語が都合のよい間投辞とされる。それだから物事をのべる凡そあらゆる文の終にむき出しの形にしたらその陳述にあたえる虞れのあるような耳ざわりな又はごつごつした角ばったところを除くためといったような気持ちで，like がおかれるのである。」と述べてあるが，例へば Eliot は Silas M., Ch. vi. に"——but when he come (=came) to the questions, he put 'em by the rule o' contrairy, *like*, and he says, 'Wilt thou have this man to thy wedded wife?' (だが，問をかける段になると，彼はまあ云わば逆式とでも云ったやり方で「汝此の男子を娶って妻となさんとするや」と云うんだ) 又同じく XIV に But it was awk'ard calling your little sister by such a hard name, when you'd got nothing to say, *like*——wasn't it, Master Marner?" (……でも妹さんをそんなむっかしい名で呼ぶなんて変んよね，まあいってみりゃなにもとりたてて云うほど偉くもないのにさ，そうぢゃ

なくて，マーナーさん？）と述べ，更らに，同書の XVI には，But it come (=came) to me all clear *like*, that night when I was sitting up wi' poor Bessy Fawkes,……（ところがその晩のこと可愛そうなベシィ・フオークスと夜ふかししていた時に，何もかも，まあ云ってみりゃすっかりわかったんだよ。）といったようによく *like* が使われているが，Wuthering Heights, xxx にも，"She sometimes eame into the kitchen all wildered *like*, and looked as if she would fain beg assistance; ……（彼女は時に途方にくれたとでも云うようにキチンにはいって来て，たすけでも求めたい様子のこともあった。）と *like* を用いている。

like は Midland では上記の外に種々の意味に用いられる；

70. *very like*,=most probably 例. *Very like*, the robbers were for putting them through the window to open the doors to the gang after all were asleep, that they might murder us at their ease. Wuthering Heights Ch.VI「まあおそらく，盗賊共はわれわれをやすやす殺そうと，皆がねしずまるのを待って，一味に戸を開けて窓をぬけるようにというのだったらう。」

I never see'd a ghost myself, but then I says to myself, '*Very like* I haven't got the smell for 'em. '……Silas Marner, ch. IV.（俺まだ自分で幽霊みたことねえだ，「多分自分に幽霊かぐ鼻がねえからだらうと云ってるだ。」）

71. *like*.=as 例. ……, he came all rihgt again, *like* as you might say, in the winking of an eye, and said "Good night," and walked off.——Ibid, ch. 1.（「彼は云わば瞬く間とでも云うように再びもとのようになって，「お休み」と云って，立ち去って行った。）

72. like as,=just as=in the same way as. (O.E.D.) この語法は卑俗な又は少々改まった文句に用いられるが，Midland dialect にはまだ残っている。例，I am *like as* I was stifled.——Ibid ch. XXI.（「私なんだが息がつまりそうよ」）

73. *Many's the time*,=many a time; very often. 元来は "many is the time." で Mid.E には可成用いられたが今は dialect speakers の間にのみ

用いられる。例. *Many's the time* I've seen him do it. (彼がそれをするのを幾度も見た。) *Many's the time* he has told me. (ずいぶんいろいろな話をしてくれた。) この語法は色々に応用される。例. *Many's the day*, and *many's the way* in which he has backed me.——Dickens, Little Dorrit, ch. X.

(註) Lancashire で耳にしたことを記憶する。

74. *Master*,=as title to a man's name. 例. *Master* Marner「マーナの大将」又は「ぼっちゃま」といって召使が主家の少年を呼ぶ時の敬称。例, Master David. 前者の場合は [ˈmestə], [ˈmɛstə], 又は [ˈmɛəstə] に対し, 後者は [mʌs], [mɑ:s] 又は [ˈmustə] と発音するようだ。但, Thames 以南の地方では何れの場合にも一般に [ˈmɑ:stə] と発音する。

75. *Mawkin*,=malkin, scarecrow or slattern 例. *the mawkin* i' the field ——Adam Bede, ch. vi.

76. *mayhap*,=perhaps. 註. happen と同じく, 英全土, Scotland, America にも用いられる。地方によっては *Mayhaps*, 又は *mayhappen* を用うる所もあったり, Cheshire では *me-happen* と云う。又 Yorkshire では *mudhap* ともいう。(E.D.D.)

77. *missis*,=*missus*,=mistress used by servant, etc. 又は自分の亭主又は他の女の亭主によって呼ばれる。例. There's a big bed o' lavender at the Red House; the *missis* is very fond of it. ——Silas Marner, Ch. XIV.

78. *moither*,=to perplex; to bewilder; to worry. 中部以北に広く用いられる。(O.E.D.) 時に *mither*, *moider* とも綴る。例. You'll happen be a bit *moithered* with it while it's so little.——Silas Marner, ch. XIV. (「赤ちゃんがそんなに小さいうちは, ちとおこまりでしよう。」)

79. *mushed*,=crushed by harsh treatment; crumbled; smashed to a pulp; depressed. 註. mush は mash からの onomatopoeic alteration. 例. You look *mushed*——Silas M.X; He was generally spoken of as a "poor mushed creatur." Ibid., X. 又 all of a mush [ˈɔ:ləvəˈmʌʃ]「どろ……」「ぐぢゃぐぢゃ」

80. *musicianer*,=musician, (*musitioner* とも綴る。)

cf. fruiter, poulterer, upholsterer, etc.

81. • *mysen*,=myself, mysel; *himsen*, himself.

• *'n*,=have, *han* の weak form. 例. ……if we'*n* done our part……(若われわれがすべきことをしていたら……)——Silas M. VI.X.;

• *naythe*r,=neither; *ayther*,=either として，方言中に頻出する。

• *nor*,=than 註. Midland 地方の out-of-the-way places で道を尋ねて，"rather better *nor* a mile," [ˈreiðə ˈbetə ˈnɔːrə ˈmail] はよく耳にする。然しこれは England のみでなく Sctoland, Ireland, North America の dialects にも広く行われる。cf. He does better nor you. (研究社：New English Japanese Dictionary 参照) 尚，Silas M., には than よりも頻用している。Yorkshire から Scotland にかけては *na* もあるが，*nar*, *nur*, *nir* とも綴られる。O.E.D. には of obscure origin とあるが，15世紀頃から使用例をみる。

• *noways*=in no way whatever; not at all=nowise=noway=「少しも……でない」註. wise=way. likewise, otherwise, leastwise などいづれも同じような成立の語である。noways の例. ……and if you was *noways* unwilling, I'd talk to Mr. Macey about it this very day.——Silas M. ch. XIV. (「そして若しあんたが少しも気が進まんけりや，今日にも，そのことをメーシィさんに云いますわ。」)

nowise の例，I'm *nowise* a man to speak out of my place. (決して私は出しゃばったことなど云う男ぢゃありません。) 註. 必ずしも dialectal とは云へぬが日常 dialect speakers の会話に聞かれる。この一文は Silas M. の Ch. VI. の the deputy-clerk が Mr. Macey に云っていることばである。

82. *off*=O.E.D. によると，元来 of の別形で，c1400 までは見当らぬが，1600後頃までは完全に両者は区別されず，弱い時は [əv] と発し，強い時は off と発したから，この両者が相通じたのは不思議でない。故に dialect としては of, from の意に用いた。従って今日でも dialect speakers の間には of の emphatic form として用い，borrow, buy, get, order 等の

後に off を用いるのは極普通となる。例. "Then you needn't tell me who you bought it *off*" said the farrier.——Silas M., ch. VI.(「それぢゃ，お前がそれを誰から買ったか云わなくても分るよ。」と馬医者は云った。)

83. *offal*,=*offald*=good-for-nothing; worthless, disreputable. 元来 *off-fall* より出た語で「落ちこぼれ」を意味し，「のこ屑」「かんな屑」「肉の食べられないくず」(O.E.D.). offal corn, offal wheat, offal wood 等広く用いられる。中部以北の方言として多く聞かれる。(E.D.D.) 例. 1) He's patience itssen wi' sich careless, *offal* creaturs——patience itsseln he is !——Wuthering Heights, ch. IX.(彼はあんなうかつな，つまらん連中にも随分よく辛棒する。——全くよく辛棒する。) 2) And I doubt he's got a soft place in his head, else why should he be turned round the finger by that *offal* Dunsey as nobody's seen o' late.....? ——Silas M., ch. XI.(それに，あの男頭がちよっと弱いんじゃないか，でなきゃ，あのやくざのダンシーなんかにうまくしてやられることもなからうぢゃないか。)

84. *Old Harry*,=The devil. Midland Dialect には超人間的な力を悪魔の業（わざ）として，種々の名でそれを呼ぶ old Harry もその一つであるが，この外悪魔の別名として，Old Scratch, Old Serpent, Old Bogey, Old Baker, Old Boy, Old A'ill Thing, Old Clouts, Old Bad, Old Gentleman, Old Hangie, Old Hornie, Old Mahoun, Old Nick, Old Nickie Ben, Old One, Old Sam, Old Smoke, Black Man, Evil One 等がある。例. 1) But ride he would, as if *Old Harry* had been a-driving him; .....——Silas M., Ch VI.(しかし，彼は悪魔が駆りたててでもいるかのように馬に乗るであらう。)

2) The shepherd himself, though he had good reason to believe that the bag held nothing but flaxen thread, or else the long rolls of strong linen spun from that thread, was not quite sure that this trade of weaving, indispensable though it was, could be carried on entirely without the help of *the Evil One*.——Ibid, ch. 1.(羊飼自身もその袋には亜麻糸のほかには何もはいっていないか，それともその糸で紡いだ丈夫なリ

ンネルの長い巻きものがはいっていたと信じるのも，もっともだったが，此の織物商売は是非やってゆかにゃならぬのだったので，全く悪魔の助けがなくてもやってゆけるという確信はまづなかった。

註．上の 83．及び 84．の *offal* や *Old Harry, old* 〃 〃 で devil を表わす云い方は North Staffordshire, Warwickshire や Lincolnshire に多く聞かれる。(E.D.D.)

85. *Oldish,*=old, with a qualification more apparent than real. 即ち rather old, elderly 位の意に用いるが Midland では，まづ old で very old ではない。strongish, youngish など，rather strong, rather young の意に用う。Dr. Evans, Leicestershire Glossary, under 'Baddish" によると，"As a general rule the termination 'ish' does not really modify the meaning of the word to which it is suffixed. It only indicate the abhorrence of a direct statement rooted in the Midland mind." という。speaker の遠慮勝な気持か習慣から来る語法のようだ。Leicestershire の田舎で，"He isn't so cushiony as most o' the *oldish* gentlefolks."（彼は大低の年よりじみた人たちのようにぐにゃぐにゃじゃねえ。）というのを聞いた。又これは Birmingham の田舎であるが，"Could you kindly bring a nice folding fan *strongish* for the *youngish* lady secretary?" と筆者自身に頼んだ50位の学校教師を覚えている。

86. *on,*=of 注．これは Midland に限ったことではなく，England. Scotland の方言に今日もなお普通 (E.D.D.) であるが，古くからの語法で Shakespeare にもその例は珍しくない。例．I am very glad *on*'t——Cymb. I.i. 164; As dreams are made *on.*——Tempest, IV. i. 156–7 O.E.D. によると 16世紀の終から of と on, が，特に on と of が *o'* と reduce して，混乱を来たし，c1750, *on't* 等において，literary use に共用されるとある。然も Dialect や Vulgar となる。Midland dialect の例をみると，to be fond *on:* to be glad *on;* to be in the right *on;* to be rid *on;* to be proud *on;* to get hold *on;* to have opinion *on;* to know *on;* to make a gentleman *on;* to be sure *on*; to make sense *on;* to take care *on;* to think *on;* 等々がある。(E.

D.D.)

87. *quick*,=quickly; respectful,=respectfully; sensible,=sensibly 等。これは spoken English ではよくある例で又 Americanism にも見られるが，この地方の dialect では決して -l(l)y を用いないのが特長と思われる。

88. *I says; says I*=I say or I said. "says I', "I says," として現在又は過去時制の文中に投入される。これは人が長い物語などする場合自分が「かくかく云ったのだ」と云うように自分のことばを交へる。無教育な人の言葉使いで屢々挿入される。例. .....and yet I said to myself, *I says*, 'Suppose they shouldn't be fast married, 'cause the words are contrairy?' ——Silas M., ch. VI. (そして私は独言で，云うのだ，「言うことはとかく相反するものだから急いで結婚すべきぢゃないとは思わない？」と。) この語法は米語にもくだけた形でよく現れる。例. 1) "It looks foolish enough now, in the daytime; but *I says* to myself, there's my two boys asleep, 'way up-stairs in that lonesome room, and.....(Ibid, ch. X 2) *Says I* to myself, I can explain better.....——Mark Twine, Huckleberry Finn, ch. XLI.

(今となっちゃ，日中はとても馬鹿げている，が，私は独ごとに云う。あの淋しい部屋にや離れ二階にうちの息子たちが二人寝ているんだ。)

89. *soft*,=foolish; silly; weak of intellect. (E.D.D.) Midland に盛んに用いられる。特に人をたしなめる時 "Don't (you) be *soft*" がよく聞かれる。"Don't be silly" に等しい，"He is a *soft*." も用いられる。Warwickshire では "to have a *soft* place in one's head.(=to be wanting intelligence)" が用いられる。

90. *sore*,=sorely=very much; exceedingly 例. I am *sore* stricken; I can say nothing.——Silas M., ch. I. (私は心が打ちひしがれて，何にも云えない。) 註. Silas の若い頃のことば故，Yorkshire dialect であらう。この pattern は sore vexed; sore puzzled などと用いられ，Mill on the Floss, III. IX では，"She was *sore* fond of us children." と用いる。そのほかに sore and～ (=exceedingly) となる。例. But he's sore an' angered. ——

Adam B.,ch. iv. (然し，彼はひどく立腹した。) この語法は，例文にあるように Adam Bede の主要舞台 North Staffordshire dialect であらう。ところが "*good and sore* と語順は変っているが，米国の Winesburg, Ohio その他数多くの作品で既に有名な Sherwood Anderson (1876—1941) の短篇 "Nice Girl" (1936) に "And now both her father and her mother, knew about Tom and Miriam. If it turned out that Harry also knew and that Agnes herself was the only one left out, she would be *good and sore*." (= very, extremely angered) の例があり，さらに "I'd like a glass of water and, if possible, make it *good and cold*" の例まである所から察すると，"good and sore" の語法となって， Americanism にまで発展している dialectical usage ではなからうかと思われる。

91. *springe* [sprindʒ] よりむしろ [sprinʒ] と発音。=active, supple, springy. (English Dialect Dict. には，Decidedly Midland word とある。例，The Squire's pretty *springe*, considering his weight.——Silas M., ch. iv.(あの旦那，体重の割に足どりが軽い。)

92. *strapping*,=strongly built, stout. 元は若い女についてのみ用いられたが今日は男女に用いる。必ずしも dialect ではないが中部以北に多く聞かれる。普通「革ひも」の意だが，背が高く，たくましい意に用う。

93. *stuff*,=medicine; physic. Midland では herb-tea ['ja:bte:] も *stuff* と云う。この地方では医薬を "doctor's *stuff*" と云って嫌う人がある。physic も同意だが learned word で通俗には余り用いぬ。He is on the *physic*. は下痢になやむ意がある。

94. *suppose*,=believe; know for certain. Yorkshire, Nottinghamshire, Lincolnshire, Rutland, Leicestershire, Shropshire, Herefordshire, Warwickshire, Sussex 等で用う。(E.D.D.)

95. *swinging*,=great, immense. 元来は swingeing ['swindʒiŋ] だが Midland dialect としての発音は ['swinʒin] 又は ['swinʒiŋg] である。例. You see, I'd made a bargain with him to buy a horse for a hundred and twenty ——a *swinging* price. (法外な安値だ) の如く， price 等と併用するのが普

通であるが，Dickens, Martin Chuzzlewit, ch. xxviii. には *swinging* profit; Mill on the Floss, ch. I, vii. には *swiging* profit; Mill on the Floss, ch. I, vii. には a *swinging* half yearly bill がある。又 Lincolnshire 辺では Them's *swinging* big *taaters*(=potatoes).——Peacock がある。又 a *swinging* lie (majority)「途方もないうそ」（圧倒的大多数）もある。(O.E.D.)

96. *swop*,=(swap とも綴る)=exchange. 元来は博労の使う語で，strike の意，即ち strike hands 約定の成立を意味する。米国南部の俗語にこの語が用いられ，又 *swipe* と云う語となって beat, steal 等の俗語で，Sinclair Lewis, Main Street の中に——oh, lez go down the lake and *swipe* some mushrats (=bushrats) out of somebody's traps, ... と現われているが，Midland の dialect の古いものが時折り米俗語に現れるのは故なきことではないように思われる。他日 Midland dialect と同地より植民の多い米南部の方言との比較究明をしてみたいものと考へている。

97. *That*=中部以北，Scotland, Suffolk, Kent 及び London の方言中には *that* を emphatic assertion に特に用いる。例. 'I suppose.....you are in a hurry, Mr. Tinker?'——'I am *that*, mum'——Bauman, Londinis men (1935),（「テンカー，お忙しいんでせう。」——「そうなんですよ，奥さん.」）又 Dr. Evans, Leicestershire Words, Phrases, Proverbs and Grammar, Can you like apples?——Oi dew *that*. (=I do that) Can you eat one?——Oi can *that*. と発音まで出した綴を用いて that の用法を示している。その外 *that* much; *this* much 又は *That's* where it is,=*that's* the point of it.（それが要点だ）等 Midland dialect では *that* を自由に用いるが，米語の現代用法にも，"I don't like *that* way."(そんなの嫌い)とか "How large was it?"——"*This* large." or "*That* large." が頻繁である。

98. *Them*,=He; God; Providence; the Heavenly Powers; は England, Scotland, Ireland の dialect に相当広く用いられる。(E.D.D.) 例. ..... you could put your trust i' *Them as* knows better *nor* (=than) we do.——Silas M., Ch. X.（われわれ人間より知り賜う神に依る）又 "*Them* above"（上におわす神）と用い，標準語 "those who" を "*Them* as" と云うのが

dialect では普通である。例. 1) .....and *them* as prayed and drawed that lots, all but that wicked un.——Silas M., XVI. (あの悪者は別として，祈り，くぢを引いた人達は……) 2) 又物にも用う。"And as for *them coats* as he gets from the Flitton tailor, they're a poor cut to pay double money for."——Silas M. Ch. XI. (そして彼がフリトン服屋から買う服といや，二倍も払うだけのことのない位の代物(しろもの)だ.) 註. こんな用法は England, Scotland, Ireland のみでなく America にまで浸透していることは，Mark Twain, O. Henry によっても衆知のところであり，them は those の意味で demonstrative adjective として "*them* baby clothes; *them* things; *them* coats; *them* dirty rags" 等の形で広く普及している。元々 *them* を God と同じく用いるのは，"presumptuous familiarity" を避けるために plural pronoun を用いたのであらう。英語の ye, you は German の Sie と比較すべきである。旧約聖書の巻頭第一節中「神」即ち 'elôhîym と云う語も複数 (gods) である。これは polytheism の名残だと解釈する人もある。

99. *thick*,=intimate; familiar; close in confidence. 然し悪い意味で用いられることが多い。cf. *thick* as thieves. 又 blood is *thicker* than water もある。Scotland では「親密」を "pack and *thick*" という。

100. *Thinks I*=I think or thought. *Says I* (前出)と同様に頻用される。

101. *yarbs; yead*=herbs (薬草), head. [h] を [y] の如く発するのが Devonshire, Yorkshire. Lancashire から Dorsetshire, Hampshire にまで及ぶ，特に Midland は田舎に旅しても聞かれる。

102. *yet while*,=just yet. Midland dialect 中特に Yorkshire 辺ではこの意に用い，*yet a bit* (=just a bit) もある。

103. *beast*,=an animal of the ox kind as opposed to horses or sheep. これは England 全土にわたる dialect で，明白に「牛」を意味する。尤も Scotland の Teviotdale 地方では特に馬を beast と云う。E.D.D. を参照。

⊙文法的観察——Midland の dialect に親しく接し，又は文献によって得たものを文法の立場から反省してみたい。

1. 冠詞の使い方，不定冠詞 a, an の用法は学校教育以前では一般普通

にはやかましく云わず，総て a のみを用いたのではないかと思われる。例へば，a unreasonable time; like a insect's habits: a information; a Ash Wednesday 等。又 "*a such a*....." の語法が用いられる。例，There's *a such* a tremendous lot on 'em.——Dr. Evans, Leicestershire Grammar. 定冠詞を trade 又は occupation を表わす名詞につける慣用。例，I always had what you may call a passion for *the* haberdashery,——Dr. Evans, Leicestershire Grammar.（私は元々その小間物商売といったものが大好きでした。）

更らに *the* both と云う云い方がこの地方一般にある。例. I'll buy *th'* both.——G.F. Northall, Warwickshire Word-Book. 又冠詞は不定冠詞でも定冠詞でも imperative sentence では，しばしば省略される。例. Have (a, or an) apple! ——G.F. Northall. Look at (the) crows.—— ibid. 尚 at; on; under の次に冠詞が省かれることが多い。例. Well, hang up th' door *at fur* (=*far*) *end* o' the shop.——Adam B., ch.I.

2. 名詞 (a) すべて reckoning, measurement を表わすものは複数でも s を付けない。He is ready to wager any man *ten pound.*（彼は誰とでも10ポンドのかけをする。）その外 ten *pun* (=pound); ten *year*; fourteen *year* ago; *acre, foot, inch, mile, yard* や年を意味する *winter* 等これに類する。(b) —st で終る名詞，特に単音節のものは複数にする場合 t を捨てて—es とする。例へば，a priest は pries'es [ˈpriːsiz] or [ˈpriːsəz] とする。これは Lancashire, Cheshire, Shropshire, Staffordshire, Warwickshire, Derbyshire 及び Lincolnshire に広く行われる。

3. 人称代名詞の目的格が Nominative の代りに乱用されのが著しく耳につく。これは米語にもよく俗語的に行われる所であるが，気をつけて観察すると，叙述を強調する場合によくある。

1) 語気激しく，驚きを表わす場合，例. *Me* stole your money!

2) be 動詞の補語として，例. It was *me* (that) robbed him. 又 Who's there? ——*Me;* who did that? —— *Her.*

3) subject が同格語等で限定される場合，例. Ay, ay, *us*, old fellows

may wish ourselves young to-night.——Silas M., Ch. XI.（そうだ，そうだわれわれ老人だって今夜と云う今夜は若かったらと思う位だ。）

4） 人称の異る人称代名詞が並列主語になる場合。例. .....and you and *me* can do that.....

5） その外この地方特有と云ってよい and を以て続く absolute construction に似た語法で objective case が多く用いられるのは注目に値する。例, I shouldn't like to fix about the garden and *her* not know everything from the first.——Silas M., Ch. XVI.（初めから何もかもおばさんには知らせずに，庭のこと決めたかないわ。）

4. 代名詞の Possessive pronouns の ours; yours; theirs が our'n [auən], your'n [juən], theirn'n [ðɛən] と発せられる。書く場合 (') はあったり，なかったりする。mine, thine の類推から生じたものであらう。*hisn, shisn* (= hers) もある。

5. Reflexive personal pronoun, myself; himself; themselves が *mysen; himsen; theirselves* となる。E.D.D. によると -sen の形は Southern English にはないが，北は Yorkshire から Northumberland に及び，その複数は —*sens* であるとある。

6. Relative pronoun で注意を要する現象は，*as* が人にも動物にも物にも用いられることである。例. Well, it's the cow *as* I *drenched*. (=give dose to beasts); Ask them *as* have been to school.(学校に行ったことのある奴等に聞くがいい。）註. *as* が Relative pronoun に使われることは，殆ど英国全体である。然し，but と共に Pseudo-relative である。

7. "*what*" の用法。Wright は E.D.D. で "used redundantly after 'like' と云うが，like のみでなく一般に比較の clauses にも用いられる。

例. 1）.....there's no voices *like what* there used to be,——Silas M., Ch. VI.（いつもあった声はもうない。）

2）.....you were *younger* a deal *than what* you are now.——ibid, Ch. X.（お前は今よりずっと若かった。）

8. 形容詞。Midland ではすべて adjectives に -er, -est を付けて com-

parison を作る。badder, baddest; gooder, goodest; curiouser, curicousest のように。さらに double comparison で 'more pleasanter' も普通に用いられる。Shakespeare のあの有名な "the most unkindest cut of all' の double superative を始めとして，Shakespeare には頻出し，米語には卑語に続出するから，異とするに足らない。

9. 数詞。Midland では dialect speakers 中には今も昔ながらの five-and-twenty, four-and-twenty を twenty-five, twenty-four より普通に使う老人がいる。Ordinals は12までは [θ] と発するものは fourth [fu:θ] だけで 'fift"; "sixt" と発する。但 tenth [tenθ]; elventh [levnθ] も今日は殆んどそのように発音されている。尚 once [wonst]; twice; thrice も時に [twa ist]; [θraist] と発音される。筆者は曾て米人の兵士 (New Englander) が once [wʌnts]; mince [mints] tooth [tu:t] と発したのを印象深く覚えている。

10. 副詞。形容詞を副詞に用いるは近世初期以来極めて一般的で，dialect としては唯 Midland のみでなく，米語でも普通である。'take it easy'; 'come quick' となるともう colloquialism である。この由来は ME の beorht (bright), beorhte (brightly) に起因し，今日 "The sun shines bright (—— brightly) と両様に用いられることからの anology であらう。

11. Adverbs の中の genitive adv. 即ち -s 語尾のものは今日でも標準語においてよりも dialect として多く用いられる傾向がある。即ち，needs, nowadays, sometimes, upstairs, 勿論 noway, nowaday, anyway, toward も用いられるが。

12. of adverb phrases. この形は dialect に限るものではないが，Midland dialect speakers が多く用いるようである。例. of a cold morning; of a dark night; of a frosty night; of a Sunday. これ等は元々 genetive adv. から派生したもので，米国東部でも店頭に，"Open *Saturdays* until 5 p.m.' 等見かけられるとのことである。"on Sundays" と前置詞を付ける。

13. 動　詞.

1) Infinitive. monosyllable words では時に -en を final にとって現れる。例. booken, putten, これは OE の -an, ME の -en, の名残りで

あらう．然し，今日殆ど廃れたようである。

Split infinitive は必ずしも dialect ではないが Midland ではよく，bare infinitive と共に耳にする。

2) 一人称単数の現在が時々 -s 語尾となる。これは ME 以来 West Midland dialect の特長の一で，East Midland dialect にはなかったので特に注目を要する所である。これがやがて，三人称語尾が一人称にまで浸透し，I says, 又は I thinks 等にまでなったのであらう。但しこのような現象は，報告伝達の言い方のみに見られるもので，一般的には一人称動詞の語尾はそのままである。即ち ME の level up の法則で -e が脱落したものであらう。

3) 複数主語の動詞語尾が -(e)n となることである。これも ME の名残りであらう。例. Northern では think*es* となるのが Midalnd では think*en*, Southern では think*eth* であった歴史がそのまま伝ってゐるようだ。従って have も *han* (∵have<haven), これは後年主導的になった East Midland dialect で書かれた Chaucer の "They *han* left" 等の語法に保存されているが Midland には weak form の *-n* として Adam B., Ch. X. '——an' somehow ye look*en* sorry too' の如く現れる。このような語尾が単数主語にも I *han* (<I'n); He *han* (<he'n) の如く転用される。

4) さらに注意に値する形は '*us as knows*' である。これは '*we who know*' であることは既に説明した通りである。

5) have と be 動詞。have は *han, in* となる外に，weak form で *ha, hae* [ə; e] と発せられ，strong form では *have, hev, 've* [æv; hev; v] となり，三人称単数には *has, 's* [hæz; z; s] が用いられる。be については *'s* となるが '*I aren't*' は Midland のみではないが，注意を要する。過去は I *were;* we *was;* you *was;* they *was;* lasses *was* growed 等の形が用いられるのは無学とばかり片づけられぬ。OE 時代の Mercian dialect の名残りであらう。即ち，OE の be (wesa) の past は，All persons; Singular は was, wēre, wǣre; phural は werum; wǣrum であった。(A Pri-

mar of Old English Grammar By J. Nishiwaki & F. Kuriyagawa, p. 73, 99,103)

6) 動詞の Past form, Past participle; Standard English で strong conjugation に属するものが weak conjugation に転じたり，又 weak に属するものが strong に転ずるものがあることは注意を要する。又 [i-a-u] の変化をするものが [-i-u-u] と変化することが多いことである。例, begin, begun, begun; sing, sung, sung. 等である。

（注意） dialect は語法，活用等がでたらめのように見えて，決してそうでなく，古い英語のものを可なり忠実に伝承しているということである。過去形にはよく過去分詞を転用している。

7) 現在分詞. 厳密な意味ではないが Standard English で現在分詞を用うるところを動詞に *a* を接頭し，I am *a*-going. の如く用ふる。これは Midland dialect のみでなく一般に地方語に行われることであるが，その起源は遠く OE に溯る。即ち "The church was in *byldynge*." の如き構造で，*a-* は *on, an, in* の転訛で，*-ing* は OE の Verbal noun 語尾 *-ung* からと一応説明は出来るように思われるが，*in byldynge* の如き構造は Norman Conquest 以来のもので且つ多く，その subject が無生物で，意味するところは passive 又は "He went on hunting." の如く Verbs of motion に続くもので，その他の場合は OE では一般に '*ic eom gangende*' (=I am going.); 'He is *cumande*. (=He is coming.) で，ME でも同様に引きつがれているので，方言のかかる一般用法の起源については即断し難い点も感じられるので，dialect のこの様な語法については種々の角度から，その使用例をさらに研究することが必要と思われる。

（昭 51. 9. 20）

Dictionaries and References

1. The Oxford English Dictionary.
2. Webster's Third New International Dictionary.
3. The English Dialect Dictionary by Joseph Wright.

4. A Dictionary of Provincial English by Thomas Wright.
5. English Pronouncing Dictionary by D. Jones.
6. A Pronouncing Dictionary of American English by Kenyon & Knott.
7. Silas Marner by G. Eliot.
8. Adam Bede by G. Eliot.
9. Wuthering Hights by E. Brontë.
10. David Copperfield by C. Dickens.
11. The Adventures of Huckleberry Finn by M. Twain.
12. An Outline of English phonetics by D. Jones.
13. Improving Your English 1961 by Vernon Brown.
14. A Primer of Old English Grammar by Nishiwaki and Kuriyagawa,
15. A Linguistic Introduction to the History of English 1965 by Morton W. Bloomfield and Leonard Newmark.
16. MS. Collection of Warwickshire Words by E. Smith.
17. West Worcestershire Words by Mrs. Chamberlain.
18. Leicestershire Words by Dr. Evans.
19. Manley and Corringham Words by E. Peacock.
20. Tape-recordings from British Drama League Dialect Records (Phonetic Script of "The Standard Passage" in 24 Variants")
21. Tape-recordings of Ameriean Speech. Note: Both above obtainable from the Secretary, British Drama League, 9 Fitzroy Square, London, W. 1